

試練に立つ婚姻と家族の倫理

阿南成一

目次

- 一、現代社会の中の婚姻・家族
- 二、現代の人間観と婚姻・家族
- 三、婚姻・家族のモラルのゆくえ

一、現代社会の中の婚姻・家族

婚姻・家族の基本的機能

最初に、婚姻あるいは家族の基本的機能について述べる。これは時代や社会が変わっても、この基本的機能はあるのではないかと思う。その機能のうち、ある時代によっては、その中のあるものが非常に重視され、別の時代には、また別のものが重視される。そのようなことがあるにしても、人類始まって以来、婚姻・家族の三つの基本的な機能はあるのではないかと思う。その三つというのは何かというと、生物的な機能、養育・教育の機能、それから経済的な機能である。

まず、生物的機能というのは子孫の繁栄のことである。人間も哺乳動物の一つである。生存環境の厳しかった時代には子孫繁栄を圖らなければならぬわけだが、今は、技術の進歩などにより人類は、繁栄し過ぎるぐらい繁栄している。これは日本でも、ついこの間まで、戦前までと云うていいと思うが、この子孫繁栄ということが大事な機能だった。

次に、養育・教育の機能であるが、よく人間の子供の胎児性ということがいわれる。人間の子供は非常に長い間、胎内にいるわけで、恐らく、哺乳動物の中では人間が一番長いであろう。その間に人間は主として、脳の形成を行っている。手足などは、胎内ではあまり成長せずに生まれてくる。ところが、生物の子供というのは外から襲われた時に逃げなければならぬため、馬などは生まれて一時間ぐらいで、もう歩けるようになる。そうでない場合は、猿のように母親の背中でもどこにでもしがみついて、一緒にいるのである。人間の子の場合は頭脳を除いて他は胎児のまままで生まれてくるので、しっかりと歩けるようになるまで、そして、食べれるようになるまでに、最低限二年とか三年かかる。

こういう事件があった。おばあさんが子供を預かっているときに、脳溢血かなかで倒れてしまった。三歳ぐらいの子供だと冷蔵庫を開けて中から何か取って食べることができが、それがまだできない赤ちゃんだったので見つかった時には死亡していた。しかし、二歳、三歳ぐらいの子供は踏み台を使って水道の水を飲んだり、冷蔵庫の中の物を取ったり、あるいは三歳ぐらいになると外へ出て助けを求める。生きていく上で必要なことを身につけ、人間として一人前になるためには、あるいは十四年間あるいは十八年間かかる。人間の場合は体だけ大きくなるのではなく、精神的にも人格的にも一人前になる必要があるため、そのための教育が非常に重要になってくる。

第三は、経済的機能だが、機能としては生産的、生産共同体としての機能と消費共同体としての機能がある。昔は、だいたい家族単位で農業をしたり、狩猟をしたり、果物を採ったりしていた。家族というものはそういう生産共同体であった。もちろん、同じ釜の飯を食べるといって消費共同体でもあった。これらの共同体の規模は、どういう生産をするかによって、非常に小さい核家族の場合もあるし、中家族、大家族の場合もある。それに伴ってその消費共同体の規模も小さかったり大きかったりする。

いずれにしても、時代や社会、経済の発展がどう変わっても、重い軽いの違いがあるにせよ、家族である以上、この三つが基本的機能であるといえよう。

現代社会化と婚姻・家族機能の変化

現代社会になって、基本的機能がどう変わったのだろうか。

まず、産業革命によって工業社会になった。このことによって、今までは家族というものが生産の単位であったけれども、生産が家族の外の社会で、特に産業革命以後は工場で行われるようになった。もちろん、今でも家族の単位で商売を営んでいる中小企業もあるが、社会で、工場で、大規模に生産がなされるようになる。家族は生産共同体であることをやめて、家族の働ける人たちは工場労働者になっていった。そして、そこで得た収入で消費共同体として残っていった。そうなると当然、工場のある都市に集まっていき、家族共同体は生産共同体でなくなり消費共同体になった。工場で働いてサラリーを貰って帰り、かろうじて消費だけはしているというサラリーマンが、現在、非常に多くなっている。

教育についても、教育の社会化、つまり学校といわれる公教育で教育が行われるようになってきた。昔の小説

を読むと、主として貴族であるが、家に算数、国語それぞれの先生をよび、子供の教育をしていたようで、大部分の子供は学校に行つてなかつた。それから後に、社会や国家が教育をしてくれるようになった。ただ、そうなつた場合に、教育を社会や学校にすっかりまかせてしまい、家庭での教育というものが、宿題をさせるぐらいになつてしまつている。もっと広い意味での教育というものが、必要になるであらう。

少子化が進み、子供が少なくなつている。初めは、家族というものは、機能として生物的機能中心であつたため、子孫繁栄が重要とされていたが、今はその反対で、子供が非常に少なくなつており、二人から三人になつている。昔、子供が非常に多かつたのは生産に必要なマンパワーのためであつた。しかも昔は、乳幼児の死亡率が非常に高かつた。そして、あまり子供が多すぎても、食いはぐれるし、少なくとも働き手が足りないということ、ある適性な数の子供がマンパワーとして必要であつた。それはともかく、現在は、生産手段において、農具だけを考へても非常に発達したから、マンパワーをそれほど必要としなくなつた。また、乳幼児の死亡率も低下した。

それから、教育の高等化である。教育のために塾などにお金がかかるので、子供は、二人、多くて三人になつた。あるサラリーマンの一生の所得から考へても、子供一人が大学を卒業するまでにかかる費用を計算すると、子供は三人が精一杯である。二人であつたら住宅ローンも払える、という計算をしているかどうかはわからないが、そのため子供の数が少ない。

婚姻・家族は今

現在、よくいわれているように核家族化している。そのため、世代間共同体、いわゆる三世代の意識というものが希薄になつている。おじいさん、おばあさんと一緒に暮らしたことのない子供が多くなり、また、年寄りが病氣などで亡くなるのを経験したことがない子供も非常に増えている。以前、筑波大学の看護婦の方にアンケート調査をしたことがあるが、一緒に住んでいるお年寄りの死に立ち会うという経験をしたことがあるという人は百人中、約二十パーセントであつた。それから、赤ちゃんのおむつを替えたことがある人、これも子供の数が少なくなつたため、約二十パーセントであつた。それから、核家族化していくと、おじいさん、おばあさんから適切なアドバイスが受けられなくなる。また、少ない子供に対して愛情が集中し、それが過剰な教育熱になつていくのではないかと思う。昔はとても忙しく、子供もたくさんいたため、親が子供の教育について過剰な関心を持つたり、あるいは投資したりするというようなことはなかつた。今の子供に比べたら本当にはつたらかしで育てられた。けれどもそこは良くしたもので、兄弟同士、友達同士でいろいろな情報を交換してカバーし合つていた。それから、よくいわれる会社人間になり、父親不在であることが、今の日本における家庭の実態だと思う。二十四時間のうち何時間居ないとか、あるいは、二十四時間のうちに家庭に居ても、子供と顔を接する時間が一時聞かないとか、二時間聞かないといった物理的不在もさることながら、精神的不在の方が重要である。つまり父親が子供について関心を持たないということである。教育のことは母親任せにしているのである。これはよくテレビドラマの中に出てくるが、子供が何かすると、母親に、「お前の躰が悪いからだ」と父親は言うだけで、精神的には不在なのである。

共稼ぎというものが非常に増えてきている。そのことによつて母親が物理的不在になるわけだが、精神的不在にもなる。今の日本の問題は共稼ぎであるといえるであらう。女性が男性と同じように社会で働くことは結構なことだが、今のシステムでは、女性も会社人間になりかねないということである。そして、父親が歩いた道を母

親も歩くと、父親と同じように会社人間にされてしまう。そして、家庭は母親不在になる。物理的不在ならまだいいのだが精神的不在ということがある。こういう家庭の現状だと、結婚するのは何のためなのだろうということ、今の若い人がそれについて疑いを持ち始めるのも無理からぬことだと思ふ。どうしても子供が欲しいといつて結婚する人もいる。また、みんなが結婚するから、適齢期になったからということ、なんとなく結婚する人もいる。はっきりした目的がもてないので、結婚モラトリアムなどと言われている。それは特に、女性において著しい。

二、現代の人間観と婚姻・家族

個人としての生きがい

まず、個人としての生きがいを第一に求めるようになったという、人間観の違いがある。私たちは、夫あるいは妻として、あるいは家族の一員としてであるよりも、個人として何か生きがいを求める。

ドイツ語でアルスザインそれからザイン・ゼルチという言葉がある。アルスザインというのは何々としての存在ということ、これは父として、母として、あるいは学校の先生として、生徒としての存在である。昔は日本にも「分」のよつなものがあつた。自分のそれぞれの身分というか、仕事、役割というか、父として、母としてなどのアルスザインというものが人間には確かにある。しかし同時に、何々の父である、母であるということとは別に、それと並んで人間自身である、人格であるという、ザインでもある。ですから、役割としての人間と、人間そのものであるという、両方がある。

戦後の日本を考へてみると、戦前あまりに役割としての人間を強調したことへの反動によつて、また、アメリカになつた憲法によつて、個人として尊重されるようになった。人々はある家族の一員であり、ある集団の一員でもあり、その中で、自分はどのような役割なのか、ということよりも個を主としているのである。よくモダニストは、日本人には個の自覚がないという。しかしまた、ポスト・モダンの人はモダニストが個人の方向ばかりに向いてしまい、それが現代社会の問題を起こしていると指摘している。

婚姻・家族というのはゲゼルシャフトなのだろうか。テンニースという人が、ゲメインシャフトとゲゼルシャフトについて書いているものがあり、その中でゲメインシャフトの代表的な例として、家族というものを挙げてゐる。ゲゼルシャフトは利益社会で、会社などのことである。今の家族は彼の言うゲゼルシャフト化しており、個人として生きる、個を生かすためのいわばある通過点、仮の住まいとなっている。実際はそうではなくて、家出しようが何しようが、私たちはある家族の一員であることには、変わりがない。儀式の上で、家族共同体というのは終いの住み家ではなくて、仮の住み家になっている。

人間の価値の一元化

一億総経済人化になつてゐるために、人間の値打ちというものはどれだけの経済的価値、収入、所得があるかということではかられてしまふ。それは、意識的たると無意識的たるとにかかわらず現在はそのようになってゐる。そのため、家庭よりも仕事を優先し、それが会社人間を生むに至つた。前述したように働く女性も会社人間になる。家庭の問題について、十年近く前に、ローマ法王がバチカンで家庭についてのある文書を出した。その中で、家庭を復元させるための今の家庭問題の根源にあるものは、経済的人間観であり、先ほど述べた、人の値打ちを経済ではかるということだと指摘している。経済的に所得は無くても、あるいは所得が低くても、価値のある仕

事が、人間にとって尊い仕事であるといえる。それは、ボランティアといえるかもしれない。例えば、母親は無報酬で子供を育てる。そのため、母親が子供に乳を与えて育て、主婦として家事をすることをつまらないと思わされている。その原因は、本人は無意識かもしれないが、やはり社会的に評価されていないのである。社会的評価を目に見える数字で表すものが所得である。そのようなことが現在、根源にあるのではないだろうか。その根本のところは、価値の転換、価値の革命をしない限り、今の家庭問題を本当に解決できないのではないかということとをローマ法王の文書では述べている。

それから、先ほどの個人としての人間の存在が、父や母である存在よりも上だと考えられている。産業革命で非常に近代化してくると、家族は外の工場で働き、それぞれ賃金を貰い、家ではそれを持ち寄って生活する。ちょうど寮と同じようなものである。百年前、フロイトだかニーチェがこれでは本当の家庭の団欒がなくなるであろうと憂えている。それは、このまま産業革命による家庭の分裂を放っておくと、家庭は崩壊するであろうという事を予言したのである。その予言が本当に百年後の今日、かなりの点で当たっていると思う。

技術人間化

現代の人間観の中で、私たちは意識するとしなやかにかかわらず、人間は技術人間である、という人間観をすでに持ち込んでいるのではないだろうか。技術というのは効率が大事だから、まず効率的である。また、効率的な生き方、これは現代人にふさわしい生き方だと思う。その効率に合わないような、いわゆる無駄なことや遊びなどを、それ自体として尊重しない。スキーやゴルフなど、いろいろな遊びがあるのではないかと言うが、それすらも、技術的、効率的にしようとしている。

私は小学校一年の時に秋田へ行き、冬には竹のようなスキーで学校に通っていた。その後、中学校に入り本当のスキーを学習した。それでも今から比べれば大変粗末なスキーであった。登るにしてもリフトのようなものはなかった。自分の足で登らなければならず、大変効率の悪いことであった。しかし、登る苦しさの後は、滑り降りる楽しみがある。それから、足で一步一步登っていくので、良い準備運動になり、血液が十分に足に回っていく。そのため、相当ひどく転んでも、めったに捻挫や骨折をしなかった。今は格好だけつけて滑るので、転んで大怪我をするのである。遊びにすら効率が入ってきている。

情報機器が発達してきた現在、それが家庭の茶の間に入ってきている。それだけではなく、子供のテレビゲームはまさに情報そのものを相手にして遊ぶというふうになっている。

情報機器が家庭の中に入ってくると、ちょうど晩ご飯を食べる頃、子供の見たいマンガやアニメなどが放送されていて、食べながら見てしまう。ですから、昔のように夕食の時に、今日、何があったということを、家庭でみんなが話し合う時間がなかなかない。子供のアニメが終わったかと思うと、天気予報などが入り、また、ニュースが始まるとお父さんはそちらの方へいってしまふ。そのため、家庭の同時性というか、同じ時に何か話しようということがなくなってきた。私は家庭にテレビが入ったのは非常に問題だと思う。ヨーロッパでは、日本のように四六時中テレビを放送していない。朝、それから、お昼のニュースが終わると今度は四時か五時ごろまでは放送されない。四時から子供向けの番組、それからニュースがある。ところが、日本ではテレビに家庭が取られてしまう。テレビゲームに子供が取られてしまう。そうになると、人と人との対話や人格的接触の時間が少なくなってしまうのである。

三、婚姻・家族のモラルのゆくえ

性のモラル

まず、性のモラルの起源は何かというと、やはり性とは子孫繁栄のためにあるといえる。そのため、動物の延長として人間にも性が与えられている。動物の性というのは発情期に限られている。人間は、四六時中、性の関係が可能である。その原因については、いろいろなことがいわれている。物好きな人が調べたものがある。人間は何月生まれが多いのかというと、戦前は月によって違っていて、特に春と秋に多かつたようである。また、昔は医学が進んでいなかったから、乳幼児の死亡率が非常に高く、ある程度たくさん産むということが必要であった。ところが現代は、性と生殖の分離が可能になった。これは知識としてもそうだし技術的にも可能になった。そうすると、性のための性ということになる。生殖を度外視した性というものが当然視されていく。昔の哲学者も書いているが、善良なる子女を暴行から守るために、必要悪としてプロステーション（売春）があつたのだと思う。そういうことがあつたにしても、大部分の人が結婚するのが当然であつた。そして、性が結婚の中で堂まされて子供を産むこと、作ることを目的としていた。しかし、今は性のための性が求められ、性は生殖と離れて自己目的となった。

ところが、エイズ問題というのがこのところで引つ掛かつてきた。エイズは性によって、夫婦間だけでなく、夫婦間以外でも感染する。これがかつてのペストと同じように、人口を減らすのではないかとわれている。このエイズ問題によって、性のための性について反省され、ブレーキがかかるようになった。そのため、性の目的は何かという、原点に帰ってくるようになった。このエイズ問題を契機として、これを利用して、性の目的、原点というところでモラルを見直してもらつていくことができるのではないかと思う。

家庭に残されたもの

家庭、親子共同体に代わるものはない、というのは当然のことといえる。「家庭に代わるものはない」という本に、私は大変感銘を受けた。それによると親は子供を〇歳から六歳まで保母さんに預けていて、保母さんが一生懸命育てるのだが、本当の親子のようにはいかない。保母さん自身が、「やはり私は母親の代わりはできません」と言っている。

有名なイスラエルのキブツの話だが、赤ちゃんの時からキブツで育つた人たちが二十歳を過ぎて結婚し、自分たちが子供をもうけたら、純粋な筋金入りのキブツつ子になってしまう。「やはり赤ちゃんは自分たちの手で育てたい」と異口同音に言ったとのことである。また、アメリカでの話だがアラビア系の母親が胎児にアラビア語で話しかけていた。生後、英語よりもアラビア語でやすほうが効き目があつたそうである。

モラル教育の原点は家庭であるが、これらは、どういふことかという点、モラルというのは何も難しい倫理学を体系的に教えるのではなく、して良いことと悪いことをしっかりわからせるといふことなのである。自分の力で悪いことをしないようにする。その悪いことをしないように、自分を押さえる力、これをヴァーチューという。ヴァーチューというのは徳、力というのが本来の意味である。ところが、人間のそういうヴァーチュー、力には、わかに出来るのではなくて、不断の絶えざる訓練が必要である。最初は親から怒られたりしながら守っているうちに、そういう制裁なしに自分のハビット（習慣）になってしまうのである。意識しなくても、してはいけないことをしないという力、これを自制心といい、そういったハビットがあつて初めてヴァーチューがあるという。

そういうハビットが、どこでどのようにして養われるのかというと、四六時中、親子が一緒にいる家庭で、親が意識しないで言ったことを行ったこと、その言動をしつかりと見て、子供はそれに倣うのである。そういう形の教育というのは家庭において他にない。

世代間共同意識とモラル

私たちは今、自分の世代だけ、自分だけで生きているのではなく、一生懸命子供を育て、環境問題を心配するというように、次の世代のことを考えている。そういう、世代間共同意識というのは家庭のみで養われる。なぜなら、家庭というのは違った世代が同居、同棲している所だからである。例えば、二世代の家庭に当てはめると、会社での社長と平社員という関係は、確かに父親と子供、おじいさんと子供ぐらいの違いはあるかもしれないが、それは、家庭でのおじいさん、あるいは親と子とは違う。家庭のみで世代間共同の意識というものが働いているのではないかと思う。その意識はどうして生まれるかというと、私たちの前の世代の親あるいはおじいさんおばあさんへの感謝、それから、後の世代への配慮などが家庭にはあるため、それを通じて世代間のモラルが養われるのである。

よく、ポスト・モダン社会といわれる。近代というのは個の自覚が必要であった。社会というのは個人からなるものであるというのも、社会契約説というのも、仮に一つの議論に過ぎないにしても、それらの考えは必要だとされた。しかし、それが百パーセント正しいかどうかということは疑問であると、そのうち考えられるようになった。私の専門の法学の学会などでも、新たな社会契約などというように言うことを言い出す人もいる。それは、初めに個人ありき、そして、その個人が社会契約の社会の中で、ある共通の目的に向かう。横の社会契約である。

それはある共通の目的に向って、ちょうど傘の骨が一緒に集まるような社会契約である。家族の見直しから、あるいは家族という原点に帰ることからポスト・モダン社会は生まれてくると思う。モダン社会の良いところは取り入れながら、その欠点を直していくには、家族という共同体がプロトタイプ、モデルになるのではないかと思う。

ヘーゲルは家族について非常に面白いことを言っている。彼の言う家族は家族市民社会で、家族はそういう段階で生まれたわけだが、やはりある意味で彼の場合、家族が原型になっているのではないだろうか。なぜなら、家族というものは、よくゲマインシャフトだと言われるが、実は、ゲゼルシャフト的なゲマインシャフトであり、ゲマインシャフト的なゲゼルシャフトであるからである。彼は次のように説明している。親と子というのはゲゼルシャフトであり得ない、夫婦というのはゲゼルシャフト的である、と言うのである。また、結婚するのはお互いに愛しているから結婚するのだが、そこには利害、打算是まったくゼロということはある得ないというのである。ヨーロッパなどでは、持参金などの問題がいろいろある。大人の結婚だから経済的なことも考える。あの男と一緒に食べていけるかなというふうに考えることも、ゲゼルシャフト的なことなのである。だから、もし家族が夫婦だけであるならば、あるいは夫婦をモデルにして家族を考えるなら、家族はゲゼルシャフトだが、夫婦というのはヘーゲルに言わせると、ゲゼルシャフト的なところがあるから、彼の言うフェアな関係、相対時する関係なので、時にはぶつかりもする。しかし、その対立をアウフヘーベン（止揚）して、夫婦一体の関係にするのは子供だと言っているのである。そうすると、子供のない夫婦はどうなるのかというと、それは特別である。大体において子供ができる。そうすると、子供という共通のものを通じて、夫婦の対立が止揚される、つまりア

ウフヘーベンされる。そして共同体となる。実はヘーゲルの家族市民社会、市民社会というのは先ほど述べた個から出発する。そういう社会契約によってかろうじて社会ができるのである。しかし、ヘーゲルによると、それを乗り越えなければいけない。そして、彼が言う本当の社会、それは彼にとっては国家、道義態としての国家である。それはやはり家族をモデルにしている。特に、近代主義社会になった時にまた、ゲゼルシャフト的なものについてヘーゲルが述べている。家族の持っている意味を取り入れるゲゼルシャフトでもあり、ゲマインシャフトでもある。また、ゲマインシャフトでもありゲゼルシャフトでもある。それが家族である。

これからの社会、社会のモラルを考えると、家族というものは、原点になるのではないだろうか、あるいは原点にしなければならないのではないかと思う。